

うたごよみ

曾於文藝

俳句

末吉俳句会

緑陰の悠久の森遊歩せり

有満 けんじ

あとからはもう誰も来ぬ木下闇

児玉 典子

もどり梅雨天文ショーは雲の上

宮路 生大子

大隅俳句会

卓一つ置くだけにして夏座敷

川崎 綾子

早苗饗の赤飯届く里の夕

吉川 ツミ

いつもより多忙なりし日麦酒買ふ

岩重 みどり

短歌

末吉山茶花短歌会

まだ生まれぬ曾孫の為にと宛焼く
手足たしかな今のうちにと

福島 宏晴

葦育つ中洲は三日で除かれて癒し
の影に瀬音も消ゆる

小園 セツ子

若葉雨かすかに光る紫陽花の
しづく静かにしたたる夕辺

高田 タエ

大隅短歌会

風の無き日照りの庭に香りくる花
の盛りのくちなしの花

安藤 フヂ子

フラフエスタ日がな観て来し限界
に夏至の夕陽が大きく落ちる

広川 ミドリ

百才の病の伯母の留守宅に豌豆の
種しまいてありぬ

川辺 敦子

「題字」

末吉文化協会会員

瀬戸口 淳 民氏

財部短歌会

螢狩り光をひきて川下る夫の御霊
か吾に寄りくる

井上 澄子

腰痛に「限界かな」と背伸びする
我にかぼちやの花がほえむ

祝迫 道雄

何思ふや認知深まる君あはれ無の
世界へ吾を忘れて

橋口 貞男

用水を三日三晩も飲み続け満水の
田の面は月光に映ゆ

児玉 次雄

病院の帰りいたたく挿木為し薔薇
は大輪の花咲かせをり

川俣 若

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

飲ん奴が焙いの苦瓜で
代えをでつ

堀 独活

垣根越し 苦瓜の炒めち
気安し仲

鈴木 一泉

苦瓜の料理い 爺あ晩酌い
大てコップ

古川 一幹

大隅薩摩狂句会

やもめ所帯 飯時きなれば
蠅が訪つ

西山 美代子

票いなかならんか焼酎で
腹探い

神宮司 素水

肥満女房 産もそな腹を
持て余まつ

山田 竜生



やごろう西瓜